向き合い 感じたバレエの「器」

輝才 KISAI

「竜宮 りゅうぐう」の演出・振付

森山 開次（47）

カメラマンがシャッターを切ると、ふわりと両手を羽ばたかせた。長い金髪は、たてがみのよう。もしペガサスがいたら、こんな感じで飛ぶんだろう。

ダンスとの出合いは意外と遅く、20歳をすぎてから。進路に悩んでいた大学時代、兄からミュージカル観劇に誘われ、劇団「音楽座」のレッスンを受け始めた。

重力を感じさせない踊りの根本には、当時の不思議な体験がある。ある日、高熱にうなされ、「体からぽっと出て壁をすり抜けて、自分の体を俯瞰（ふかん）して眺めていました」。夢か、うつつか。「その飛んでいるような感覚を踊りで求めるようになりました」

ただ、小さい頃から内股で、バレエのレッスンは「苦行」そのもの。電車のつり革につかまりながら5番ポジション（外向きの足を交差させる形）をし、食事中も足の甲をストレッチして必死に立ち向かった。

上達したい思いとともに、疑問も湧いた。「なんで、がに股じゃないといけないの？」。内股の美しさを生かす道を探るうちに、コンテンポラリーの世界へ行き着く。代表作「KATANA」など和を題材にした作風で注目され、NHK「からだであそぼ」で子どもたちにも知られるようになった。

初めて振り付けたバレエ作品が、浦島太郎を題材にした「竜宮 りゅうぐう」。昨夏、新国立劇場バレエ団が東京で初演し、9月に大阪へお目見えする。

「こどものためのバレエ劇場」のシリーズで、衣装のデザインも担当。「亀の姫」「イカの3兄弟」など絵本から飛び出したような個性豊かなキャラクターが舞い踊る。

団員とともにバレエに向き合い、「器の大きさ」を感じる日々だった。「たとえば、亀の姫がつま先でステップを踏む表現があるのですが、一つの形でも色んな表現ができる。バレエの包容力、広さ、深さを感じました」

「見に来てくれた子どもたちが亀の姫に憧れて、演じる日がきたらいいな」。再演が続き、いつかこの新作が「古典」となる日を夢見ている。

文・李田光　写真・篠田英美

9月23日午後2時、フェスティバルホール（06・6231・2221）。4歳～小6は4300円、中学生以上5300円。インタビューの全文は当日のプログラムに掲載します。

承諾番号21-2809

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。